
消失してフェード

社 九生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消失してフェード

【Nコード】

N3959W

【作者名】

社 九生

【あらすじ】

取るに足りない？僕？の話。

また忘れた。

一体何の話をしていたんだっけ？

それと、これはすごく失礼な質問だけど……君は誰だっけ？

すまない。君はきっと、僕のお見舞いに来てくれたんだよね。そうでなければ、ここには半ば働く機械と化した看護師さんか、自分の病室がどこだか分からなくなった痴呆老人しか来ないからね。

そりゃ驚くよ。ある時なんか、一人のお爺さんがフラフラやってきたと思ったらさ、その洗面台の横にあるゴミ箱の前でパジャマのズボンを脱ぎ始めるんだ。僕はすぐに看護師さんと呼んだよ。このボタンを押すとナースステーションで『ビー』って音がしてね、彼女たちは何をしようか——気に入らない患者の悪口に花を咲かせていたり、電話越しに恋人とデートの約束をしていたりしようが——新幹線よりも早く病室へ来ることを求められる。たとえばずら半分で呼んだとしてもだ。

これにはちよつと同情しちゃうな。だって一人じゃ満足に用も足せない人間のために、自分の人生を捧げなくちゃいけないんだぜ。いくらお金がもらえるからってさ、これはちよつと正気の沙汰じゃないような気がするんだよ。

で、病室にはベテランの看護師さんが来たんだ。

「あら、まだ生きてたの？」って顔をしてね。

彼女は「大丈夫ですか？」とか「トイレはこちらですよ」とか口では優しくお爺さんを誘導してあげるんだけど、本当はあのまま冥土送りにしたかったんじゃないかな。

それぐらい、言っちゃ悪いけど「死に損ないの相手は疲れた」って顔をしてるように見えたんだよ。一瞬だけだね。

結局、彼女は介護入門の教科書に載りそうなくらい理想的な態度で老人を案内していったよ。

つまり、彼女たちは本音と建前をうまく使い分けながら人助けをしているわけだね。そこに僕みたいな意識倒錯気味の輩と、ごぼうを五つ繋ぎ合わせたような老人を集めれば立派な総合病院の完成ってわけだ。

別に看護師たちの人間性を疑うとか、老人ばかりが闊歩するこの真っ白なゾンビランドについて批判したい訳じゃない。ただ頭で感じたことをそのまま口にただけだ。

分別のつかない子供がちょっとアイスクリームの形に似た雲を見つけて母親を呼んだりするのと同じさ。これをいい歳の大人がやると世間じゃ嫌われるだろ。空気が読めないだのTPOがどうだの言われてさ。

でも、僕にとっては大事なことなんだ。瞬間瞬間の想いを言葉にして宙にばらまくっていうのはね。度が過ぎると単に哀れな独り言になって、「はいはい、お爺ちゃんお帰りはこちらですよ」ってあしらわれることになるけど。

ただ幸いなことに、僕は老人と形容されるにはまだ早すぎるし、君みたいな人がこうして見舞いに来てくれる。

君が友だちなのか家族なのか、また兄弟なのか親戚なのかはちょっと分からないけれど、これはとても幸せなことだと思う。

その幸福感に甘えて一つ質問がしたいんだけど……僕はこのところ、人生においてすこぶる重大なことを忘れている気がするんだ。

仮にだよ。僕は自分がどうしてこんな病室にいるのか皆目見当がつかないんだけど、その原因がたとえば交通事故だったとするよね？

峠道だとか高速道路だとか、場所はどこだっていいんだ。僕が時速五十キロぐらいで車を飛ばして、真正面から同じ速度かそれ以上で迫ってくる金属体と衝突する。大惨事になるのは言うまでもないよね。

でも僕はどうやら命だけは助かった。神様の気まぐれだね。ただし丸ごと無事ではすまなかった。これも神様の気まぐれだ。

僕はその事故で脳の、人間が人間らしく生きるに最も必要な部分

に深刻なダメージを負って、どうやら病室のあまりフカフカでないベッドの上で残りの人生を過ごさなくちゃいけなくなった。

日に三度の食事と本やテレビといったせめてもの娯楽、そして話の主導権を握りっぱなしなゾンビたちを仲間に与えられてね。こう考えると僕が置かれている状況も少しは真実味があるというか、説得力のある仮定だと思うんだ。

でもね、ある予感が……僕の心を突つつくんだよ。あまりそう思いたくはないんだけど、僕は一人っきりで車を運転して一人っきりで大惨事を迎えた訳じゃない気がするんだ。

あの車には僕以外の誰かが乗っていた。それが一人なのか二人なのか、また僕とどういう関係なのかはさっぱり謎なだけけれども、幽霊じゃなかったことだけは確かだ。

何でって、仮に幽霊が乗ってたとしても僕が罪悪感を感じる謂れはないじゃないか。彼らはもうとつくに死んでるんだからね。

僕が君に質問したいのはこの点だよ。

あのとき僕の運転する車に乗っていた彼、あるいは彼女に——心当たりはないかい？

いや、ちよつと不親切だったね。相手の顔や名前も分からないのに、そもそもこれは仮定の話なのに、こういう質問をするのはちよつと無神経すぎた。

携帯電話があるんだ。僕がまだ真つ当な人間でいられた頃に使われていたやつで、メモリの中に色んな画像があるんだ。風景だとか人物だとか、まるで液晶のなかの住民みたいな感じでね。

言っちゃえばこんなのは画像の粗い静止画たちに過ぎないんだけど、僕にはどうしてか彼らが生きているように見えるときがあるんだ。

で、液晶の住人の一人に、こういう女の子がいてね——名前は分からない。でも、すごく印象的な笑顔だと思わないかい。

こつ、死ぬ時にさ、この笑顔に見送られて死ねるんなら天国でも地獄でもどつちでもいい……そう思わせるような笑顔だよ。

でも怖くなるんだよ。こんな素敵な笑顔をする彼女を助手席に乗せてさ、時速五十キロで死の扉を叩く。

仮に、仮にだよ。僕だけが生き残って彼女は死んだとか、あるいは手足だとかを失って、僕がこうして呑気に話している間にも彼女は生き地獄を味わっているかもしれないと考えると、胸が苦しくてたまらなくなるんだ。

またこうも考える。僕は彼女を愛していたとするよね？ 仮に、仮にだよ。

僕は彼女を、つまりこの世で最も大事にしていた人を失った。そして今度は彼女との思い出も忘れていくんだ。

彼女がどんな話し方をして、あるデートの日にはどんな格好をしてきて、ちよつと焦っていたり、頬が赤かったりだとか、そもそも僕たちはどんなふうに恋人同士になって、他愛のないお世辞や世間話以上の会話をするようになったとか、どの笑顔が一番彼女らしく、そして僕が一番気に入った彼女の仕草や言葉は何だったかとか——何もかも忘れていくんだ。

現にひとかけらの記憶さえ僕の頭には残っていない。僕と彼女はそもそも恋人じゃなかったっていうんなら話は別だけど。

僕はこうやってね、架空の悲劇をいくつも自分のなかで作り出して寝る前に怯えて、そして朝起きてからも怯えてるんだ。

でもちよつとすれば忘れる。人の頭にストローを突き刺して脳みそを吸う生物がまわりついてるみたいに、どんどんどんどん記憶が、意識が、僕の視界があやふやになっていくんだ。

ひよつとすると僕は単に妄想狂のキチガイなのかもしれない。それはとても虚しい気がするけど、馬鹿みたいな事故を起こして大切な何かを失ったって仮定に比べれば、はるかにマシな気がする。

ああ、話が逸れちゃったね。いやそもそも何の話をしていたんだっけ？ よく分からなくなっただから、いま頭に思い浮かんだことを言うよ。

『人間は生まれてから現在までの記憶の連続性を持って始めて、自

分を唯一無二の『個』と認識できる』

有名な学者さんが言ってた言葉だと思う。具体的に誰なのかは例によって忘れたけどね。

ああ、そろそろ帰る時間かい？ 君は仕事なのか勉強なのか、とにかく何らかのことで忙しそうだからね。

また見舞いに来てくれると嬉しいな。今の僕はまだ、何かを忘れたっていう感覚を失ってはいないんだ。忘却感、とでも言おうか。それがあるから、僕はギリギリのところ自分で自分を維持していらる。でもいつの日かそれさえも失って、病院内を彷徨うゾンビの一人になっていくことだろう。

だからワガママかもしれないけど、一つだけお願いがある。ひよっとしたら今までに何千回としたお願いかもしれない。

難しいことじゃないよ。たとえば僕が五分前に何をしたか、昨日何を言ってたか、そういうごく平凡なことで良いんだ。

また話を聞かせに来てくれないか。僕が僕であるために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3959w/>

消失してフェード

2011年9月4日03時38分発行